

糸川雅子歌集

『ひかりの伽藍』

(ながらみ書房)

県立高校の教師を退き、ゆとりを得た著者の穏やかな時間
間が流れる本歌集はどこか懐かしく、滋味ゆたかである。
四国の緑に囲まれた小さな町に棲む著者は、難解なことは
を使わず、自然体でやわらかに歌を詠む。

四音の枕詞のくはくの一音のなか 風わたりくる
ゆうぐれはひかりのなかに伽藍みえひとこいしさを忘
れてしまおう

タイトルにもあるように、光や風、季の移ろいを敏感に
とらえ、詩情に満ちた世界を展開する。

いま誰れか来てすわりたり縁側に脚をゆらせるわがか
たわりに

家の内と外の世界をつなぐ縁側で空を眺め、手仕事をし、
ものを想う。そして、社会に向けるまなざしはシャープで、
ことばは静かだが、裡に秘める思いは熱い。

指定されかばわれながらしはらくを存え滅ぶ(絶滅危
惧種)

権力は好みて口にす「肅肅と」肅肅とみなみに海がえ
ぐるる

世の中を見据え、誠実に表す歌柄には確かな信頼がある。
モチーフは多岐にわたり、また何気ない歌も魅力的で、読
むたびに味わいが深くなる。

(浅野千里)

川上まなみ歌集

『日々に木々ときどき風が吹いてきて』

(現代短歌社)

中学校の国語科教員である作者の、職場での出来事や、
それに対して感じたことが中心となっている。

人も自分も短所ばかりを見てしまう癖 手の汗が紙に
吸われて

仕事だけしていればいいと思う心に貼り付けたような
満月だった

先生は何十人もの生徒を見るのだから、生徒の短所を把
握していなければ仕事は終わらない。例えば、提出物が揃
わない、など。短所を把握して先手を打つという、後ろ向
きの先回りをして生徒の動きをコントロールする、一日を
ただ穏便に終える…これが作者のいう「仕事だけして」い
る状態だと思う。「教師つてそれだけではないでしょ？」
という作者の信念が透ける。(私も教員だが、同感だ。)

先生を辞めますと告げる日もこんな雨の降る日のご
うな気がする

でもうまくやってるじゃん、と言った人を殴るみたい
に笑ってしまう

出勤の車の中で泣くような春になっても春は好きだ
うまくやれていないから悩む。荒れる。春には卒業生だ
けではなく、同僚も数人いなくなる。涙も出る。

教壇に立ち続ける熱意ある先生がたを応援したくなる。

(清水佑太郎)